世界が注目！憲法九条を守り、生かそう！

島九条の会通信

NO .101　2023. 6. 13
島中学校区九条の会発行
連絡先　井川方
TEL・FAX　058-231-5293

岐北・岐阜西・島九条の会共催　緊急集会のお知らせ

急な話ですみません、6 月 24 日（土）です

詳しくは別紙チラシをご覧ください　沖縄と平和を考えます

島九第６３回例会の報告

「考えよう、確かめよう、憲法第９条」―映画「第九条」をみて

5 月 13 日(土)島 9 は見出しのテーマで、63 回目の例会を島公民館で開きました。参加者は 11 名でしたが、映画鑑賞後中身の濃い意見交換ができました。

「20XX 年時の総理大臣と内閣は、憲法九条の改正に踏み出す意思を明確にした。国民の意思を聞くために各年代に諮問委員会を作った。
メンバーはマイナンバーによる無作為の抽選により選ばれた十二人。諮問委員会は話し合いにより、全員一致の答えが求められる。
その結論の総計により、政府は方針を決定するとしている。憲法九条は破棄か？維持か？」

という言葉で始まる映画「第九条」、舞台は２０代の諮問委員会です。選ばれた 12 人は弁護士・主婦・防衛大学生・工場労働者・引きこもりの青年など様々な立場の人々です。「12 人の怒れる男」や「12 人の優しい日本人」と同じように、議論は行きつ戻りつします。

「大東亜戦争」・米軍基地・米ソ冷戦・核などなど、初めは九条破棄論が優勢だったかに見えたものが、日本国憲法の成立から今に至る歴史を知り、議論が少しづつ変わり、それまで沈黙を守り最後に発言した工場労働者の女性の、九条は残すべきだという趣旨の印象的な発言で映画は終わります。12 人の出した結論は映画の中では示されませんが、九条の会に参加する私たちには希望が持てる、やはり九条は大切だという確信が持てる形で映画は終わります。

上映後の話し合いで出た主な発言を次に紹介します。

- あれだけの意見（映画の中での）を言える人は少ない。９条廃棄論者をどうやって説得するのか、自分のように勉強していても難しいのに。
- 「愛する人が殺されたら‥‥」などと映画の中でやりとりがあったが、個人の問題と国家の問題を一緒にしてはいけない。
- ９条について議論すると映画のようになるが、戦後の民主主義は本当に育ったのか疑問だ。９条の問題よりも、もっと日常の中での問題を真剣に考えた方が良いのでは。また、マスコミも責任を果たしていない、みんな政府の意向に忖度した論調だ。
- 政治家にはもっと勉強してほしい。ジャーナリストにはもっと頑張ってほしい。
- メディアの問題が大きい。メディアの社長と首相が会食をする、これでいいのか。読者がメディアを、投書や電話などで監視すべきだ。
- 「第九条」というタイトルはみんな引いてしまう。監督の宮本氏の焦りを感じる。もっと身近な問題を取り上げた方がみんなに考えてもらえるのでは。
- 作者はよく世の中の議論を拾っている。実際に自分はあんなふうには言えない。

- 映画のような議論ができない、その理由の一つが教育だ。長い間政権が教育を骨抜きにしてきた。
- 今の状況はのっぴきならないところに来ている。武器輸出、徴兵制にもつながりうるマイナンバーなどと戦争が近づいている。阪田元法制局長官は「９条は死んだ」と言い出す。アメリカのTIME 誌も岸田首相は、「日本が軍事大国になる道を選んだ」と書いた。
- 自民党の保守派（日本会議・統一協会系など）は、家父長制を維持しようとしている。
- 戦争の議論はやっぱりすべきだ。「戦争は絶対にしてはいけない」本当にその通りだ。
- 若い人にどう伝えるか？給食費の問題で若いお母さんと話すと、話が通じた。やっぱり一つひとつ話していかなければならない。
- 岸田は日本をどうしようとしているのか、歴史を知っているのか。
- なんとかしなければならないと思うのはメディアだ。どうやって国民をコントロールしているのか。ウクライナ問題にしても「北朝鮮」のミサイルにしても「専門家」の解説のみで、戦争論や戦争を否定する議論はない。メディアをまともにしなくては。

最近気になったニュースを二つ（沖縄に関係した）

「我々にとって台湾は生命線だ」（琉球新報電子版 5/31）

５月３１日の衆院外務委員会で、日本維新の会の和田有一朗氏が、中国による台湾武力統一の可能性を踏まえ「我々にとって台湾は生命線だ。互いに国益を共有する存在だ」と発言したそうです。台湾を中国（による武力統一）から守る決意を示せと、日本国政府に迫ったとのこと。

状況は若干違いますが、「満蒙は日本の生命線だ」と叫んで大日本帝国が 15 年戦争に突入した悲劇を、和田氏は知っているのでしょうか？　もっともこの手の認識は、和田氏だけでなく「台湾有事」言い立てていた故安倍晋三氏はじめ、日本の「保守」派には多いのも事実です。

「北朝鮮」の「弾道ミサイル」対策の PAC-3 は台風で避難（RBC：琉球放送 6/1）

およそ１ヶ月前から「北朝鮮」の「弾道ミサイル」から沖縄の住民を守るためとして、大宣伝の末に宮古島・石垣島・与那国島に配備された PAC-3 の発射機は、台風 2 号の影響で倒れることを恐れて立ち上げられなかったそうです。

これを伝えた RBC の 62 インタビューに、**防衛ジャーナリスト半田滋**さんは次のように指摘しています。

台風でミサイルの発射台が倒れたら大変（住民の命より PAC-3 が大事？）

「防衛省から見ると台風で PAC―3 が転倒して壊れてしまう危険性と、実際に北朝鮮の人工衛星が南西諸島の島の上に落ちてくる危険性をはかりにかけた結果、どちらが蓋然性が高いかというと台風で倒れるほうが可能性は大きいし『それであれば取り返しがつかないからやめよう』ということでやめている」

ほぼ同じルートを通過する韓国の人工衛星は何もせず

「韓国も全く同じような南西諸島の上空を通るルートで人工衛星を複数回打ち上げていて、一番最近は 5 月 25 日に打ち上げている。この韓国の衛星に対して一度も破壊措置命令を出さず、北朝鮮に対しては毎回出すというのはことさらに北朝鮮を危険視しそのために防衛力強化が必要と、南西諸島の防衛力強化が必要だと県民の考え、人々の考えを誘導する意図があるのではないか疑いたくなる」

「配備が軍事技術的な話ではなく政治目的のためのように感じる」

以前沖縄の琉球新報のインタビューで、防衛研究所防衛政策研究室高橋杉雄室長が、中国と戦争になった場合南西諸島が戦場になる、その場合「持久戦」に持ち込めば云々と語っていました。海上での戦闘を想定しているようですが、要塞化が進む南西諸島です。もし戦争になれば海上で済むはずがありません、今回の PAC-3 騒動を見ても、軍隊は何のためにあるのか考えさせられます。

11 月 3 日　「2023 ぎふ平和のつどい」の講演者が決まりました

今年の講演は、政治学者の白井聡さんと」東京新聞記者の望月衣塑子さんです。詳しくはこれも別紙チラシをご覧ください。なお今年の会場は、ひろーい岐阜市民会館に戻ります。満席の会場でお二人をお迎えできたらと思います。チケットの入手方法などはもう少し先にお伝えします